

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370859

研究課題名(和文)ロシア系ディアスポラの社会的ネットワーク～女たちの満洲とその後～

研究課題名(英文) Social Networks of Russian Diaspora: Women during the Period of Manchukuo State and after Its Collapse

研究代表者

生田 美智子 (IKUTA, Michiko)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・名誉教授

研究者番号：40304068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、満洲のロシア系ディアスポラの社会的ネットワークが満洲国時代および満洲国崩壊後、世界中に離散した亡命ロシア女性の生き残りをかけた戦いを支えたことを明らかにすることである。そのため、旧満洲でフィールドワークを実施し、アメリカ合衆国、ロシア連邦、カナダ、日本で公文書館を調査し、さらに、亡命ロシア女性本人、子孫、目撃者からオーラルヒストリーを採取した。その結果、ロシア系ディアスポラ社会の女性のネットワークが満洲国時代にはロシア人としてのアイデンティティを支え、満洲国崩壊後は彼らのロシア人としてのアイデンティティの再確立、すなわち、在外ロシアアイデンティティを支えていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to clarify how social networks of Russian diaspora supported the struggle for survival of Russian female emigres not only during the period of Manchukuo state, but also after its collapse when women were disseminated all over the world. For this purpose, field research was conducted in Northeast China and oral histories were collected in Russian, America, Canada and Japan. Also, official documents from archives of the above mentioned countries were examined. We clarified that social networks helped to maintain Russian identity in the time of Manchukuo and in the post Manchurian period. These networks also helped to revive Russian identity and creating the so-called Russians in Abroad.

研究分野：ロシア史

キーワード：亡命ロシア ディアスポラ社会 満洲 ジェンダー ネットワーク アイデンティティ 回想 記憶

1. 研究開始当初の背景

(1) ロシア系ディアスポラはソ連時代には黙殺されてきたが、ソ連崩壊後、政治的緩和により反革命勢力に関する情報へのアクセスが可能になったことで研究が急速に隆盛となった。

(2) 旧ソ連から各民族共和国が独立したことにより新たなロシア系ディアスポラが旧ソ連領内に現出した。また、グローバル化の進展による人口移動の加速化により、ディアスポラが切実な問題として認識されるようになった。

(3) 旧満洲の亡命ロシア人研究は西側への亡命研究に比べ、アジアに対する関心の低さから遅れをとっていたが、ソ連崩壊後は、満洲についても、ディアスポラ社会の適応・同化や異文化混淆の問題が国内外で議論されるようになった。

2. 研究の目的

(1) 本研究もロシア系ディアスポラ研究の一つであるが、満洲の亡命ロシア女性の社会的ネットワークに着目することでかつての事実上の植民地で生活したロシア系住民のアイデンティティの特徴を見る。

(2) 満洲時代に関しては、亡命ロシア女性を基軸にしながらも、「女たちの満洲」をキーワードに五族の中でネットワークを捕らえることを試みた。本科研の採択が決まった直後に大阪大学出版会から『女たちの満洲』出版の提案があったことから、日本、モンゴル、中国、朝鮮、ロシアの専門家たちと共同研究体制を組み、多民族国家満洲国の、経済、教育、宗教、マス・メディアのネットワークをとらえることを目的とした。

(3) 社会的ネットワークという国民国家の枠組みに規定されない文化的アイデンティティに基づくディアスポラ社会のありようをみることで、グローバル化時代の社会的関係形成のモデルとする。

3. 研究の方法

(1) 亡命ロシア女性が生活した旧満洲でフィールドワークを行った。訪問地は以下の通り。ハルビン、大連、ロマノフカ村、ジャムス、満洲里、ジャライノール、ラブダリン鎮、シルフォーヴァヤ、ヴェルフ・クリー、ポクロフカ、ポシチューチェ、ポピライ、トゥルントゥイ、三河、下護林、上護林、恩和、ハイラルなど。

(2) 世界に離散した亡命ロシア女性に関する公文書を閲覧するというマルチ・アーカイヴの手法をとった。訪問した図書館や文書館は以下の通りである。モスクワのロシア国立軍事公文書館、ロシア連邦国立公文書館、ロシア国立経済公文書館、ロシアステイト図書館、ペテルブルグのロシア国立歴史公文書館、ロシアナショナル図書館、国立ハバロフスク地方公文書館、ワシントンの国立公文書館・記録管理庁、ニューヨークのコロンビア大

学・稀覯本・マニユスクリプト図書館のバフメーチェフ・アーカイヴ、ニュージャージー州のトルストイ財団アーカイヴ、ハーバード大学燕京図書館、トロント大学附属図書館、ハワイハミルトン図書館。

(3) 亡命ロシア女性本人や親族、目撃者からオーラルヒストリーを採取した。協力いただいた方々は次の通り。オリガ・バキチ、エレナ・キリロヴァ、ナタリア・ザルツカヤ、ヴェーラ・パン、リュドミラ・フォター、ステパン・スタコフ、パヴェル孫、ヴィクトル曲、山田久代、井上ともゑ、加藤淑子、田中信子、松本スミ、田坂はる子、斉木タマキ、相川和子、高木榮子、本山新一の各氏。採取したオーラルヒストリーを当時の新聞・雑誌の記事や同様な体験をした人の回想と比較することで検証した。

4. 研究成果

(1) オーラルヒストリーから得られた成果に関しては、2014年10月にウラジオストクでハルビンからソ連に引き揚げたナタリア・ザルツカヤさんに聞き取り調査を行い、ウルスラカレッジの世界的なネットワークのお蔭で、第二次世界大戦後亡命ロシアの学校が閉鎖される中でも母校が1949年まで存続できた話を聞くことができ、その成果は『セーヴェル』31号にて公刊した。さらに、トロントでは白軍のバキチ將軍の孫娘であるオリガ・バキチさんからオーラルヒストリーをとった。彼女は反革命の烙印をおされハルビンの共産党青年同盟への加入もソ連への引き揚げも許可されなかったが、亡命ロシアのネットワークによりオーストラリアに移住できた事情を聞くことができた。

(2) アーカイヴ調査から得られた成果に関しては、2015年のワシントンのNational Archives and Records Administrationで上海警察ファイルを見つけ、風俗営業に従事する亡命ロシア女性のネットワークを調査することができた。ニュージャージー州にあるトルストイ財団のアーカイヴでは、個人ファイルから第二次亡命の際の出入国をサポートする社会的ネットワークの存在を確認した。

(3) フィールドワークから得られた成果に関しては、2013年9月に、生田が主宰する雑誌『セーヴェル』の会員たちと満洲調査旅行団を結成し、大連、ハルビン、旧天理村、旧ロマノフカ村、牡丹江、横道河子、七里村を調査し、満洲国時代を知る古老に聞き取り調査を実施した。たとえば、七里村では、旧近藤林業(旧白系露人コワリスキーのヤプロニ林区)の横道河子製作所跡では、郭井郁さんに当時の話を聞くことができた。帰国後、近藤林業経営者であった近藤繁司氏の孫娘である相川和子さんからも聞き取り調査を実施した。旧天理村では劉鳳雲さんからソ連軍の満洲侵攻当時の話を聞くことができた。帰国後は旧天理村の住民で残留日本婦人であ

った田中信子さんに聞き取り調査を実施し、話の内容の裏付けをとった。その成果は『セーヴェル』30号に「満洲旅行記」と題して公刊した。2016年9月には『セーヴェル』会員と調査団を結成し、ハルビン、旧弥栄村、旧千振村、佳木斯、満洲里、旧三河地方、ハイラル地方で墓を調査し、古老に聞き取り調査を実施した。その成果は『セーヴェル』33号に「満洲・内モンゴル調査旅行記」として公刊した。この時の調査では、ハルビン正教会アレクサンドル遇石司祭から宗教ネットワークについて事情を聴取することができた。(4)学会報告としての成果に関しては2015年8月の第9回国際中欧・東欧学会で、オーガナイザーとして、パネル“Women of Manchuria: The Case of Russian Émigrés”を組織し、生田が“Women of Manchuria: Self-Portrait of Japan Seen through the Visual Media”、伊賀上菜穂(中央大学助教授)が“Representations of Russian Émigré Women in ‘Manchuria’ Provided in Japanese Navels”、藤原克美(大阪大学教授)が“Consumer Society and Women in Manchukuo from the Case of Harbin”と題してそれぞれ発表し、フロアーと活発に意見を交換した。この時の議論が次のパネルの組織につながった。すなわち、2016年9月、The Second EAJIS Conference in Japanでオーガナイザーとしてパネル“Ordinary Women in Extraordinary time”を組織し、生田が“The Imprisonment of Women in Siberia”、藤原克美が“Women as Consumers in Harbin: Focusing on Department Stores”、伊賀上菜穂が“Interethnic Marriages in Japanese Novels Set in ‘Manchukuo’: Relationship between Russian Migrants and Asian People.”と題して報告し、国内外の研究者と知見を交換した。国際シンポジウムとしては、大阪大学で「女たちの満洲とその後」を2016年7月9日に伊賀上菜穂の科研「旧満洲亡命ロシア人の文学的表象に関する比較研究：日本語文学を中心に」(JP15K02263)と共催した。第二部の「国際対話：女たちの満洲：1945年を中心に」をオーガナイズし、オリガ・バキチ、相川和子、高木榮子の各氏をパネリストに、フロアーの満洲生活体験者や研究者、院生との間で国際対話を組織し、「戦争と女性」問題の解明を次の課題として浮かびあがらせることができた。(5)上述以外に公刊されたものとしては、まず満洲国時代の亡命ロシア系住民全体のネットワークを見るために白系露人事務局の機能を検討したものがある。事務局は日満当局が白系露人を一元的にコントロールするための組織であるが、ハバロフスクの公文書館に所蔵されている設立規定や財政基盤を示す文書を典拠に事務局は亡命ロシア人が自己の利益を代表する組織でもあったことを明らかにした。その成果は、「ハルビン

の白系露人事務局の活動」(阪本秀昭編著『満洲におけるロシア人の社会と生活：日本人との接触と交流』2014年)で公刊した。女性に特化したネットワークに関しては、生田美智子編著で『女たちの満洲』を刊行した。その中で、雑誌『満洲グラフ』を資料として満洲国防婦人会のネットワークや「ミス満洲」というイベントの実態から五族協和とは裏腹の日本人枢軸民族化という日本の描く自画像をみた。共同執筆者の藤原克美は、女性の日常の消費生活ネットワークから日本人とロシア人に市場の共有が見られる一方で、各民族特有の消費物資や消費スタイルのネットワークが民族を分断したことを明らかにした。中嶋毅は、女子教育のネットワークが満洲における亡命ロシア女性のロシア・アイデンティティの維持に貢献したことを示した。ハリン・イリヤは、宗教を認めないソ連に比べ満洲ではロシア正教と満洲国当局との親和性があったが、日本が正教徒に神社参拝を強要したことから正教徒が宗教ネットワークを通じて団結し、天照信仰に抵抗したことを示した。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計 10件)

生田美智子、終わらない戦争(2): 女性の場合: シベリア抑留、セーヴェル、ハルビン・ウラジオストクを語る会、査読有、33号、2017年、5-24頁。

生田美智子、終わらない戦争・シベリア抑留(1): 佳木斯第一陸軍病院の看護婦たち、セーヴェル、ハルビン・ウラジオストクを語る会、査読有、32号、2016年、35-41頁。

生田美智子、女たちのシベリア抑留、第31回ロシア極東と関西の日露歴史家・経済学者シンポジウム、ロシア科学アカデミー極東支部・歴史・考古学・民俗学研究所、査読無、2016年、25-38頁(ロシア語)、154-166頁(日本語)。

生田美智子、アメリカ・カナダの文書館・図書館における満洲引揚亡命ロシア女性の足跡調査、セーヴェル、ハルビン・ウラジオストクを語る会、査読有、31号、2015年、160-167頁。

生田美智子、満洲国引揚者の記憶(1) - ウラジオストク在住ナタリア・ザルツカヤさんの証言、セーヴェル、ハルビン・ウラジオストクを語る会、査読有、31号、2015年、105-112頁。

生田美智子、旧満洲旅行記、セーヴェル、ハルビン・ウラジオストクを語る会、査読有、30号、2014年、120-121頁、142-145頁。

生田美智子、ハルビンにおけるロシア人風俗女性：日本から見た表象、セーヴェル、査読有、30号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2014年、5-19頁。

生田美智子、満洲の中のロシア：歴史を刻み

つけた国際年ハルビン、善隣、国際善隣協会、
査読有、2014年、9月号、18 - 25頁。
生田美智子著・除余訳、哈爾濱娯楽場所里的
性感俄国女郎(20世紀20 - 40年代)、俄羅斯
学刊、第2期、黒龍江大学(中華人民共和國
黒龍江省ハルビン市)、査読無、2014年、25
- 29頁。
生田美智子、日本の大衆出版物にみるハルビ
ンの亡命ロシア女性、国際研究集会：引揚地
ウラジオストク：亡命ロシアの過去と現在、
極東連邦大学(ロシア連邦ウラジオストク
市)、査読無、2014年、79 - 80頁。

〔学会発表〕(計 8件)

生田美智子、女たちのシベリア抑留、第29
回西日本・ロシア・東欧研究者集会、2017年
3月25日、西南学院(福岡県福岡市)。
生田美智子、日本赤十字社看護婦と家父長的
天皇制国家、第9回ロシア女性史学会国際会
議、2016年10月15日、国立スモレンスク大
学(ロシア連邦スモレンスク市)。
Michiko Ikuta, The Imprisonment of Women
in Siberia. The Second EAJIS Conference in
Japan. 2016年9月24日、神戸大学(兵庫県
神戸市)。
生田美智子、女たちのシベリア抑留、第31
回日露極東シンポジウム、2015年9月9日、
ロシア科学アカデミー極東支部・歴史・考古
学・民俗学研究所(ロシア連邦ウラジオストク
市)。
生田美智子、満洲の女たち：ビジュアル・メ
ディアを通して見る日本の自画像、第9回国
際中欧・東欧研究協議会世界大会、2015年8
月5日、神田外語大学(千葉県幕張市)。
生田美智子、ロシア日本のマス・メディアに
みるハルビンの亡命ロシア女性、国際会議
「引揚地ウラジオストク：亡命ロシアの過去
と現在」、2014年、10月7日、極東連邦大学
(ロシア連邦ウラジオストク市)。
生田美智子、満洲の中のロシア：歴史を刻み
つけた国際年ハルビン、善隣協会フォーラム、
2014年4月25日、国際善隣協会(東京都港
区新橋)。
生田美智子、ハルビンの風俗産業で働く亡命
ロシア女性、第5回スラブ・ユーラシア研究
東アジア会議、2013年、8月9日、大阪経済
法科大学(大阪府八尾市)。

〔図書〕(計 5件)

Michiko Ikuta, Lexington Books, *Kimitaka
Matsuzato ed., Russia and Its Northeast
Asian Neighbors: China, Japan, and Korea,
1858-1945.* 2017. 151-166.
生田美智子他、スモレンスク国立大学出版会、
時と文化のプリズムを通じた母性と父性、
2016年、258 - 261頁、(ロシア語)。
生田美智子編著、大阪大学出版会、女たちの
満洲：多民族空間を生きて、2015年、313頁。
生田美智子他、ナウカ社、日本とロシア(ユ
リア・ミハイロバ編)、2014年、68 - 95頁、

(ロシア語)。
生田美智子他、ミネルヴァ書房、満洲におけ
るロシア人の社会と生活：日本人との接触と
交流(阪本秀昭編著)、2013年、21 - 48頁。

〔その他〕

ホームページ等
雑誌 Sever (セーヴェル)ハルビン・ウラジ
オストクを語る会
[https://sites.google.com/site/severkhar
binvladivostok/journals](https://sites.google.com/site/severkharbinvladivostok/journals)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生田 美智子 (IKUTA Michiko)
大阪大学・言語文化研究科・名誉教授
研究者番号：40304068

(2) 研究協力者

オリガ パチキ (BAKICH, Olga) (トロント
大学リサーチアソシエイト・カナダトロント
市)

トマス ラフーセン (LAHUSEN, Thomas) (ト
ロント大学教授・カナダトロント市)

楊 大慶 (JAN, Dachin) (ジョージ・ワシ
ントン大学准教授・アメリカ合衆国ワシントン
D.C.)

McVey 山田 久仁子 (MCVEY
YANADA, Kuniko) (燕京図書館司書・アメリカ
合衆国マサチューセッツ州ケンブリッジ市)

パトリシア ポランスキー
(POLANSKY, Patricia) (ハワイ大学附属ハミ
ルトン図書館司書・アメリカ合衆国ホノルル
市)

イネッサ カプラン (KAPLAN, Inessa) (連
邦大学准教授、ロシア連邦ウラジオストク
市)

エレナ アウリレネ (AURILENE, Elena) (太
平洋国立大学教授・ロシア連邦ハバロフスク
市)

マリア クロトヴァ (KROTOVA, Maria) (サ
ンクトペテルブルグ国立経済金融大学准教
授・ロシア連邦サンクトペテルブルグ市)

ナタリア プシカリョヴァ
(PUSHKAREVA, Natalia) (ロシア科学アカデ
ミー民族学・人類学研究所主任・ロシア女性
史学会会長・ロシア連邦モスクワ市)

藤原 克美 (FUJIWARA, Katsumi) 大阪大学
教授)

塚田 力 (TSUKADA, Tutomu) (中国語通訳)